

理工科日语分级读物

5 - (1)

# 日本人の一年

日本岁时记

3-4  
6

高等教育出版社

理工科日语分级读物 5-(1)

# 日本人の一年

## 日本岁时记

李长信等 选注

高等教育出版社

## 编者说明

这本读物属理工科日语分级读物第五级，所选内容为日本的日常生活和风俗习惯等，故可供各专业学生及社会上各行各业的日语学习者学习使用，一方面学习日语，另一方面也可以了解日本人民的生活习惯。

本书由周炎辉、顾明耀审阅

责任编辑 赵德雍

理工科日语分级读物5-(1)

日本人の一年

日本岁时记

李长信等选注

高等教育出版社出版

新华书店北京发行所发行

河北省香河县印刷厂印装

开本787×960 1/32 印张4.375 字数81 000

1988年9月第1版 1988年9月第1次印刷

印数00 001—1 400

ISBN 7-04-000696-O/H·46

定价：1.25 元

## 主编者例言

一、这套分级读物共四十余册，配合理工科公共日语的教学，供学生课外选读，也可供学习日语的科技人员阅读。

二、这套分级读物共分五级，一至四级分别与日语教学大纲的四个教学阶段相配合，第五级供高年级学生选读。这套读物旨在帮助学生巩固课内所学词汇和语法知识，扩大学生的日语知识视野。

三、读物内容第一级为生活方面、科技方面的短文；第二级为科技知识、科学实验、科技对话、科学家故事等方面的短文；第三级及第四级为理工科各类专业的短文；第五级为应用文、科技书的前言、随笔等方面的短文。

四、每本读物均在封面上标明以属级别，例如“理工科分级读物 1—(1)”表示该书为第一级第一本。

五、每本读物均由若干篇短文组成，每篇短文后附有必要的词汇、语法注释。

六、每本读物均附有全部选文的参考译文，译文在不影响汉语表达习惯的前提下尽量直译，以供学生对照检查自己对原文的理解是否正确。

周炎辉 顾明耀

## 前 言

这本小册子是曾在我院任教的日本专家严佐先生（本名岩佐昌璋），为日语专业开设“日本问题讲座”而编写的。全书内容生动有趣，文字浅显易懂。几年来，不少兄弟院校采用了这本讲义作为补充教材使用，博得师生们的好评。有些理工科院校，特别是出国进修班的学员，也希望得到这本书，并建议针对他们的学习情况增补一些注释，以便更好地学习。为了满足广大读者的需要，在一九八一年供校内学习参考用的打字稿的基础上，又进行了全面的补充修改。我们希望本书出版后，对社会上学习日语的和关心日本问题的读者能有所帮助。

本书共分两部分：前一部分，按十二个月的顺序叙述了日本人在一年中例行的主要节日，以及有关的风俗习惯；后一部分，概括地介绍了婚丧嫁娶的活动情况。外语院校在教学中使用，如结合图片进行讲述，大约需要八个学时；理工科院校选修日语的学生，在学习的后期，完全可以参照译注进行自学。

为帮助读者更好地理解书中的某些内容，原计划收录一些有关的图画和照片，但为了减少印刷成本，决定予以割爱。任课教师可适当选用图片辅

助教学。

本书译注的分工：李长信负责“序”“正月”～“三月”，秦明吾负责“四月”～“七月”，潘寿君负责“八月”～“十二月”，李宗惠负责“结婚和葬礼”。李长信对译文和注释作了全面校订。

由于我们水平有限，不当之处，希望广大读者批评指正。

北京第二外国语学院

李长信

1984年6月

# 目 次

序 .....	1
一月 .....	6
正月 .....	7
正月の食事 .....	8
年始回り .....	9
正月の遊び .....	9
年賀状 .....	10
初詣 .....	10
正月の飾り .....	11
旗びらき .....	12
新年会 .....	12
書初、初荷など .....	12
仕事始め .....	13
七草粥 .....	13
松の内 .....	13
三学期 .....	14
成人の日 .....	14
二月 .....	26
冬の暖房 .....	26
冬の衣服 .....	27
附、日本人の衣生活 .....	28
冬の食事 .....	29
附、日本人の食生活 .....	29

節分	31
厄落し	31
建国記念の日	31
三月	39
附：日本の教育制度	40
雛祭	41
春分の白	42
国際婦人デー	42
四月	47
年度始め	47
就職	48
春闘	48
花見	49
五月	54
メーデー	54
ゴールデン・ウィーク	55
子供の日	55
母の日	56
六月	58
七月	60
夏の生活	61
夏やせ	62
七夕	62
ボーナス	63
八月	67
夏の遊び	67
盆	68



盆踊り	70
中元	70
原爆記念日	70
終戦記念日	72
九月	76
台風	76
敬老の日	77
お月見	78
秋分の日	78
十月	79
稻刈り	79
体育の日	80
十一月	84
文化の日	84
七五三の祝い	84
勤労感謝の日	85
十二月	86
歳暮	86
クリスマス	87
年賀状の準備	88
忘年会	88
餅つき	88
御用納め	89
大晦日と除夜	89
結婚と葬式	92
結婚	92
葬式	95
参考訳文	102

## じよ 序

日本は四方を海にかこまれた島国である。その国土の中心をなす日本列島は、北海道・本州・四国・九州という四つの大きな島とその付属島嶼からなり、ゆるやかな弧を描きながら東北から西南の方向にのびている。国土の大部分は山地で、耕作や居住に適する土地は広くない。山地の起伏も大きく、三千メートル以上もある日本アルプスの山脈以下、千メートル前後の山がいたるところにみられる。山や高原と盆地・平野の分布は極めて複雑であり、海岸線も他の列島よりはるかに変化にとむ。

気候は、日本のおかれた地理的位置の関係で、一年の気温の変化が大きく、四季がはっきりしている。また東アジア特有の季節風のため、冬は寒さが一段ときびしく、夏は非常に蒸し暑いという特色がある。だが、こういう特色も大まかにそういえるだけであって、日本全土が同一の気候条件のもとにあるわけではない。例えば北の北海道は亜寒帯の特色をそなえているし、南の琉球列島は亜熱帯の特色をもって

いる。本州<sup>ほんしゅう</sup>でも、東北地方<sup>とうほくちほう</sup>や北陸地方<sup>ほくりくちほう</sup><sup>10</sup>は冬<sup>ふゆ</sup>は世界<sup>せかい</sup>でも有数<sup>ゆうすう</sup>の積雪<sup>せきせつ</sup>をみる「雪国<sup>ゆきくに</sup>」であるの<sup>に</sup>たいし<sup>11</sup>関東<sup>かんとう</sup>・東海<sup>とうかい</sup>・近畿<sup>きんき</sup>など<sup>12</sup>の冬<sup>ふゆ</sup>はカラカラ<sup>かんそう</sup>に乾燥<sup>かんそう</sup>し、ほとんど積雪<sup>せきせつ</sup>をみないなど、太平洋側<sup>たいへいようがわ</sup>と日本海側<sup>にほんかいがわ</sup>とでは気候<sup>きこう</sup>に大きな違い<sup>ちが</sup>がある。さらに前述<sup>ぜんじゆつ</sup>した複雑<sup>ふくざつ</sup>な地形<sup>ちけい</sup>の影響<sup>えいぎょう</sup>で各地<sup>ちち</sup>の気候<sup>きこう</sup>にはそれぞれ変化<sup>へんか</sup>がある。そして、むしろこのように地域<sup>ちいき</sup>による気候<sup>きこう</sup>の差<sup>さ</sup>の大きいこと<sup>こと</sup>が日本の気候<sup>きこう</sup>の特色<sup>とくしよく</sup>だとさえいえるのである<sup>13</sup>。

日本民族<sup>にほんみんぞく</sup>はこのように複雑<sup>ふくざつ</sup>で<sup>14</sup>変化<sup>へんか</sup>の多い風土<sup>ふうど</sup>のもとで、古代<sup>こたい</sup>から労働<sup>ろうどう</sup>し、生活<sup>せいかつ</sup>し、独自の文化<sup>どくじ</sup>・独自の風俗習慣<sup>ふうぞくしゅうかん</sup>をつくりあげてきた。一八六八年<sup>いちぱんろくじゅうはちねん</sup>、明治維新<sup>めいしせいしん</sup>によって日本<sup>にほん</sup>は近代<sup>きんたい</sup>的な統一国家<sup>とういつこくた</sup>を成立<sup>せいりつ</sup>させ、それとともに<sup>15</sup>近代化<sup>きんたいか</sup>——資本主義化<sup>せいほんしゆぎ</sup>の道<sup>みち</sup>を歩みはじめた。その結果<sup>けつか</sup>、現在<sup>げんざい</sup>のような高度<sup>こうど</sup>に発達<sup>はつたつ</sup>した資本主義国家<sup>せいほんしゆぎこくた</sup>に成長<sup>せいちよう</sup>した。この歴史過程<sup>れきしかてい</sup>で、古来<sup>こらい</sup>からの風俗習慣<sup>ふうぞくしゅうかん</sup>は、あるものは消滅<sup>しょうめつ</sup>し、あるものは大きな変容<sup>へんよう</sup>をとげつつ<sup>16</sup>現在<sup>げんざい</sup>にひきつがれている。また、これまでになかった新しい風俗習慣<sup>あたらふうぞくしゅうかん</sup>も次々に生まれて<sup>う</sup>いる。たとえば、古来<sup>こらい</sup>、日本人<sup>にほんじん</sup>の暮し<sup>くら</sup>には、改まった<sup>あらた</sup>特別な<sup>とくべつ</sup>生活<sup>せいぜつ</sup>をする日と、毎日くり返しておこなわれる常<sup>つね</sup>の日とがあった。誕生<sup>たんじまう</sup>・結婚式<sup>けつこんしき</sup>・葬式<sup>そうしき</sup>・祭礼<sup>さいらい</sup>の日などは着

物・たべる物・心構えなどまでが常の日と違  
 っていた。この常でない日を「ハレ」<sup>10</sup>の日と  
 いい、一方を「ケ」<sup>10</sup>の日とって區別して暮  
 らすのが伝統的な日本人の生活だった。衣服に  
 は「ハレ」の日に着る晴れ着とふだん着の區別  
 があったし、食事<sup>じよくじ</sup>も、餅<sup>もち</sup>や赤飯<sup>せきはん</sup><sup>20</sup>やその他のご  
 ちそうは「ハレ」の日だけのもので、ふだんは  
 粗食<sup>そよく</sup>というのがふつうだったのである。「ハ  
 レ」の日に「ケ」の日の生活をしたり、ふつう  
 の日に一軒<sup>いっけん</sup>だけ「ハレ」の生活をしたりするこ  
 とは共同体の秩序<sup>きやうどうたい</sup>を乱<sup>ちつじよ</sup>すこととして許<sup>みだ</sup>されるこ  
 とではなかった。しかし、明治<sup>めいじ</sup>以後<sup>いご</sup>、この二つ  
 は、とくに都市<sup>とし</sup>においては余<sup>あま</sup>り區別<sup>くべつ</sup>されなくな  
 ったし、かつて「ハレ」の日であった年中<sup>ねんじゆうぎやう</sup>行  
 事<sup>じ</sup>のうち沢山<sup>たくさん</sup>のものが形骸<sup>けいがい</sup>化<sup>か</sup>し、そのかわりた  
 とえば日曜<sup>にちやうび</sup>日の暮<sup>くら</sup>しのような、新しい「ハレ」  
 の日ともいうべき<sup>21</sup>ものが生まれているのであ  
 る。この小冊子<sup>しょうさつし</sup><sup>22</sup>は現代<sup>げんだい</sup>の日本<sup>にほん</sup>の年中<sup>ねんじゆうぎやう</sup>行  
 事<sup>じ</sup>を追<sup>お</sup>いながら<sup>23</sup>、日本人<sup>にほんじん</sup>の一年間<sup>いちねんかん</sup>の生活<sup>せいかつ</sup>を記述<sup>まじゆつ</sup>しよ  
 うとするものである。

## 注 釋

1. 四方を海にかこまれた 四面环海的。它是“島国”的定語。
2. (体言)+からなる【慣用型】由……組成。

3. ……以上もある 在……以上的。“も”是提示助词，接于数词之后，表示夸张的语气。
4. アルプス (Alps)〔名〕 阿尔卑斯山。横亘欧洲中南部的高山。西起法国，经意大利、瑞士、德国、东到奥地利的维也纳。“日本アルプス”是比喻说法，泛指日本中部地方的“飞驒”、“木曾”、“赤石”等山脉。
5. はるかに (遙かに) 〔副〕表示距离、程度上“远远地”，与“より”搭配一起使用有“比……得多”的意思。
6. 日本のおかれた地理的位置の関係で 由于日本在地理上所处的位置。“日本のおかれた”作“地理的位置”的定语，也可译作“日本所处的地理位置”。“おかれた”是“おく(置く)”的被动过去式，助动词“た”用连体形，在这里表示状态。“で”是格助词，表示原因。
7. (终止形) + という特色がある 具有……的特点。“という”是格助词“と”后续动词“いう(言う)”而成的惯用型，起接续作用，和其前的部分一起作定语。
8. (用言连体形) + わけではない “并不是……”。“わけ”是形式体言，表示“道理”。“わけではない”是从道理方面强调某种情况并不存在，与“……のではない”相似。
9. 東北地方 (とうほくちほう) 〔名〕 东北地方，是福岛、宫城、岩手、青森、山形、秋田六县的总称。旧称奥羽地方。
10. 北陸地方 (ほくりくちほう) 〔名〕 北陆地方，是福井、石川、富山、新潟四县的总称。
11. (の・体言) + たいし 与……相对而言。

“たいし”是动词“たい(对)する”的连用形，也常说“にたいして”。

12. 関東・東海・近畿など 关东、东海、近畿等地方。“関東”包括东京都和神奈川、埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉六个县。“東海”泛指东京到神户的沿海地区。“近畿”是指京都附近而言。
13. むしろ……とさえいえるのである 甚至还可以这样说。“むしろ”是副词，表示“与其……倒不如……”；“とさえ”是表示叙述内容的助词“と”和强调称谓内容的提示助词“さえ”重叠形式；“いえる”是动词“いう(言う)”的可能式；“のである”是形式体言“の”与判断助动词“である”构成的谓语，表示加强肯定语气，有“……就是”的意思，口语中用“のだ”或“のです”。
14. ……複雑で “で”是形容动词“複雑だ”的连用形，与“変化の多い”并列。“このように複雑で変化の多い”是“風土”的定语，意为“这样复杂多变的自然条件”。
15. それとともに “それ”是指代“近代的な統一国家を成立させる”的。“……とともに”是格助词“と”后接副词“ともに(共に)”构成的惯用型，表示随着前一事物的发生或变化的同时，后一事物也跟着发生或变化。“それとともに”可译作“与此同时”，和“それと同時に”用法相同。
16. (連用形) + つつ [惯用型] 表示前后两个动作的同时进行，或两个状态的同时存在，相当口语的“ながら”，但只见于文章。“とげる(遂げる)”〔他下一〕达到，完成，有了，实现。“あるものは大きな変容をとげつつ現在にひきつがれている”意为“有的发生了很大改变，现

在又被继承了下来”。“変容(へんよう)”〔名〕

“变样”“改观”；“ひきつがれている”是“ひきつぐ(引継ぐ)”被动态现在式，意为“被继承下来”。

17. 改まった “改まる(あらたまる)”+过去助动词“た”是作定语，意为“郑重其事的”，与“特別の生活をする”一起共同修饰“日”。
18. ハレ〔名〕 动词“晴れる”转变的名词，有“隆重”“正式”的意思，并非外来语。
19. ケ(褻)〔名〕 原意是“非正式”的意思，是与“ハレ”相对而言的“普通日子”“平常日子”。
20. 赤飯(せきはん)〔名〕 日本喜庆节日吃的“紅小豆(大米)饭”。
21. (体言)+ともいふべき+(体言)〔惯用型〕也可以说是……的，也可叫作……的。其中“べき”是文语推量助动词“べし”的连体形。
22. 小冊子(しょうさっし)〔名〕 小册子，小书。口语中多用“パンフレット”。
23. ……を追いながら 按……顺序进行……。“追う”是“循序”的意思，“ながら”是接续助词，表示同时进行。文中“現代の……ながら”作“日本人の一年間の生活を記述しようとする”的状语。

いち がつ  
一 月

にほんじん せいかつかんかく いちねん せいかつ いち  
日本人の生活感覚では一年の生活はやはり一  
がつ 月からはじまる。いちがつ くる ひとつき  
月からはじまる。一月は古くは「睦月」ともい

った。季節としては冬<sup>ふゆ</sup>。厳寒<sup>げんかん</sup>の時期<sup>じき</sup>だ。北風<sup>きたかぜ</sup>が烈<sup>はげ</sup>しくなり、こがらし<sup>そと</sup>が外<sup>そと</sup>を吹きすさぶ。表日<sup>おもてに</sup>本<sup>ほん</sup>（太平洋側<sup>たいへいようがわ</sup>）は晴れた日<sup>は</sup>も多いが、裏日本<sup>うらにほん</sup>（日本海側<sup>ほんかいがわ</sup>）ではどんよりと曇<sup>くも</sup>った日<sup>ひ</sup>が多く雪<sup>ゆき</sup>が降<sup>ふ</sup>る。草<sup>くさ</sup>も木木<sup>きぎ</sup>も枯<sup>か</sup>れ、荒涼<sup>こうりょう</sup>とした感じ<sup>かんじ</sup>の風景<sup>ふうけい</sup>となる。

正月<sup>しょうがつ</sup>。一年<sup>いちねん</sup>のはじまりの日<sup>ひ</sup>である一月一日<sup>いちがついついち</sup>は、元日<sup>がんじつ</sup>ともいう。一日<sup>いついち</sup>から三日<sup>みつか</sup>までを三ケ日<sup>さんがにち</sup>といい、この期間<sup>まかん</sup>は官庁<sup>かんちやう</sup>はもちろん、商店<sup>しょうてん</sup>や会社<sup>かい</sup>・工場<sup>しやこうじやう</sup>なども三日間<sup>みつかかん</sup>休<sup>やす</sup>みにするところが多い。この三ケ日<sup>さんがにち</sup>の三日間<sup>みつかかん</sup>が狭<sup>せま</sup>い意味<sup>いみ</sup>での正月<sup>しょうがつ</sup>と考<sup>かんが</sup>えていいと思<sup>おも</sup>う。正月<sup>しょうがつ</sup>は旧<sup>ふる</sup>い一年<sup>いちねん</sup>が去<sup>き</sup>ってあたら<sup>あたら</sup>し<sup>とし</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>ので「あらたま<sup>きたん</sup>った・すがすがしい・喜<sup>たの</sup>ばしい・めでたい・楽<sup>たの</sup>しい」というふうな感じ<sup>かんじ</sup>がその言葉<sup>ことば</sup>の中<sup>なか</sup>に含<sup>ふく</sup>まれている。正月<sup>しょうがつ</sup>のこの感じ<sup>かんじ</sup>を表<sup>あら</sup>わすのに正月<sup>しょうがつ</sup>気分<sup>きぶん</sup>という言葉<sup>ことば</sup>がある。

正月<sup>しょうがつ</sup>はお盆<sup>ぼん</sup>とともに、日本人<sup>にほんじん</sup>のもっとも盛<sup>さか</sup>んに祝<sup>いわ</sup>う祝<sup>しゆくじつ</sup>日<sup>にち</sup>である。古代<sup>こたい</sup>の日本<sup>にほん</sup>民族<sup>みんぞく</sup>には、死者<sup>ししや</sup>が一定<sup>いひてい</sup>の年月<sup>ねんげつ</sup>経<sup>た</sup>つと「祖<sup>そ</sup>霊<sup>れい</sup>」とな<sup>な</sup>って、生前<sup>せいぜん</sup>の住<sup>じゆう</sup>所<sup>しよ</sup>から余<sup>あま</sup>り速<sup>とほ</sup>くない所<sup>ところ</sup>に存在<sup>そんざい</sup>しつづけ、子孫<sup>しそん</sup>の生<sup>せい</sup>業<sup>ぎやう</sup>を守<sup>まも</sup>るとい<sup>い</sup>う信<sup>しん</sup>仰<sup>ぎやう</sup>があ<sup>あ</sup>った<sup>た</sup>。そして、「祖<sup>そ</sup>霊<sup>れい</sup>」は毎<sup>まい</sup>年<sup>とし</sup>、決<sup>きま</sup>った時<sup>とき</sup>に子孫<sup>しそん</sup>の家<sup>いえ</sup>を訪<sup>ほう</sup>問<sup>もん</sup>する<sup>する</sup>と信<sup>しん</sup>じられていた。正月<sup>しょうがつ</sup>と盆<sup>ぼん</sup>は、ま<sup>ま</sup>さにこの祖<sup>そ</sup>霊<sup>れい</sup>が子孫<sup>しそん</sup>の家<sup>いえ</sup>を訪<sup>おとず</sup>れる時<sup>とき</sup>だ<sup>た</sup>るのである。正月<sup>しょうがつ</sup>に



家々を訪れる祖霊は、新しい年の生活を祝福する神であると同時に、穀物の豊作をもたらす農耕神ともされてきた<sup>11</sup>。だが、現在の大多数の日本人にとって、正月はたんにめでたい伝統的な祝日であるにすぎず<sup>12</sup>、その宗教的意義が意識されることはまずない<sup>13</sup>とわいていい。

正月の食事 一月一日の朝は、ふつう一家そろって<sup>14</sup>屠蘇<sup>15</sup>を飲み、雑煮<sup>16</sup>をたべる。屠蘇は一種の薬酒で、元日にこれをのめば一年の邪気を除き、寿命をのばせるという迷信がある。屠蘇を飲む風習のまったくない地方もある。そういう所でも酒はのむ、酒といっても、中国の酒は蒸溜酒が多いが、日本酒は醸造酒で、アルコール度数も15%ぐらゐと低い<sup>17</sup>。

雑煮は餅を入れた汁。作り方は地方により、家庭によっていろいろ違う<sup>18</sup>。一般に、鶏肉・かつおぶし<sup>19</sup>・野菜で仕立てた汁に餅を入れたもので、関西は白味噌<sup>20</sup>の汁、関東はすまし汁に餅を入れる。また、その餅も東日本はのし餅<sup>21</sup>を切った切餅、西日本は一つ一つ丸めた丸餅が多い。また、もちを煮て汁に入れる所も、焼いて入れる所もある。

また数の子<sup>22</sup>とわいて鰯の卵を乾燥したものや、田作り<sup>23</sup>（「ごまめ」ともいう）とわいて小さな鰯を干し、それを焼いて砂糖醬油をから